記憶のおくのそこ

落ちぶれた天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶のおくのそこ

【Ｎコード】
Ｎ１９０２Ｚ

【作者名】
落ちぶれた天使

【あらすじ】
コナンと哀はふとしたことから7歳までしか記憶がなくなります。そこから組織につながっていき・・・

記憶（前書き）

ああああああああああああああああ

記憶

いまは帰り道。

小学生になっちまった俺、江戸川コナンこと工藤新一と、

同じくはいばら哀こと宮野志保。

そして探偵団の3人。

かろうじてまだ正体はばれてねえけど、

ナンっかこう、イやな予感がするんだよな。

そんなことを考えていたとき、元太がいまにも切れそうな紐で縛ってある鉄パイプの山にのぼっていった。

かるくコナン達の身長の倍ある。

げんたはそれをむりやりよじのぼっていく。

光彦「なにやってるんです!?げんたくん!!あぶないですよ!?」

歩美「そーだよ!おりなよ!!」

げんた「しゃーねーだろっ俺のアイスの当たり棒が上にのっちまったんだから!!」

コナン「おいげんたぁ」

哀「あきらめるのね。」

げんたガ無事おりてきて安心しとときっ・・・

ガラン！！

すさまじい音をたててひもが切れ、鉄パイプがふってきた。

コナンはげんたと光彦をむりやりおして哀は歩美をおしだした。

歩美達は鉄パイプからのがれた。

が、

コナンと哀は鉄パイプの下敷きになってしまった。

歩美「コナンくん！哀ちゃん！！」

げんた「きゅ、救急車だ！！」

光彦「はい！」

二人は頭から血をだしていていしきがない。

じきに救急車がきて二人は病院に搬送されていった。

大阪の探偵とそのガールフレンドや、蘭、小五郎。博士、えり、園子、そして歩美、げんた、光彦は手術中とひかる二つのランプの前にすわっていた。

探偵団や蘭は泣いている。

同時にランプがきえた。

ドアからは医者と手術用のベットにのせられた二人がでてきた。

みんなは医者と二人にかけよった。

蘭「こ、コナン君と哀ちゃんは！？」

医者「二人とも幸い傷はあさかったのでもう大丈夫でしょう。」

この言葉でみんなは泣きあうようにしてよろこび二人の病室にむかった。

二人がめざめると・・・

コナン「ん・・・？」

蘭「あ、コナン君！分かる？蘭おねえちゃんだよ？」

コナン「お姉ちゃんだれ？蘭はもっと小さいよ。それに俺の名前は工藤新一だよ？」

蘭「え？」

全員がかたまった。

はかせと服部はただあたふたしている。

小五郎「お、おいコナン！おれだ！毛利小五郎だ分かるか！？」

コナン「おじさん？どうしたの？いきなり年とったみたい。それに蘭はどこ？」

蘭「わ、わたしよ！蘭はわたしだよ？」

コナン「え？だって蘭は俺と同じ7歳だよ？それにここにいる人たちみんな誰？博士もいきなりなんで白髪になったの？」

全員はまた目をみひらいた。

哀「んん・・・」

哀が起き上がった。

歩美「あ、哀ちゃん！大丈夫？」

哀「あれ、あなただあれ？それにわたしは宮野志保だよ。哀じゃないよ？」

やっと服部と博士は理解した。

コナンと哀の記憶が本当の7歳までしかなくなってしまったことに。

きさき「記憶喪失、としてはおかしいわよね・・・？」

コナンと哀はまだ目をくりくりさせてみしらぬ人達を見上げている。

服部「ど、どうなってんねやろな？と、とりあえずかずは、医者よんできい。」

服部はあわててていった。

～診察後～

医者「傷のほうはあさいんで退院は明日していいんですが、これは一時的な記憶喪失ですね。いつかはなおるとおもうんですが・・・」

医者はそれだけいうとでていった。

～そして次の日～

哀とコナンはとりあえず、服部もつきそって博士のうちにとまることになった。

歩美「ねえ博士。明日トロピカルランドにいかない？」

博士「おおそうじゃな。蘭君が記憶喪失のときもいったしのお。みんなでいくかのお。」

光彦「よかったですね♪」

歩美「あ、それと」

歩美はコナンの手と哀の手をとるといった。

歩美「わたしは吉田歩美。コナン君と哀ちゃんと同じ7歳よ。歩美ちゃんってよんでね♪」

げんた「俺は小島げんた！おれもお前らとおなじ7歳だ。げんたくんってよんでくれよな！それとおまえらと歩美と光彦でくんだ少年探偵団のリーダーだ！」

光彦「ぼくは円谷光彦です！僕も7さいです！光彦君ってよんでください！！」

コナン「俺は工藤新一！7歳！新一君ってよんでくれ！」

哀「わたしは宮野志保！7歳だよ！志保ちゃんってよんでね！」

コナン達のはつげんに目を点にしていたが、またはしりだした。

記憶（後書き）

ああああああああああああああああああああ

正体（前書き）

ああああああああああああああ

正体

いまはトロピカルランド入場口前

哀「あれ？テレビのカメラがいるよ」

光彦「実は、今日おそらく１０万人目の客がでるらしいです！」

哀「へえ。」

そういうとコナン、哀歩美げんた光彦はかせ、服部はチケットをわたしてはいっていった。

だがコナンがとおろうとしてチケットをわたしたときクラッカーがなった。

コナン「へ？」

職員「ぼうや、おめでと～ぼうやはここの１０万人目のお客さんよ～」

コナン「やった！！」

げんた「いいな～」

歩美「コ、あ、新一くんすご～い！！！」

博士「よかったの新一！」

キャスター「よかったね。僕。名前なんていうの？」

新一「えっとね、工藤新一、７歳！」

キャスター「新一くんか～ほかのお友達の名前も紹介してくれる？」

哀「わたしは宮野志保！７歳だよ」

服部はおどおどしながらはかせにはなしかけた。

服部「いま、あの二人やばいことゆうたよなぁ・・・？」

博士「こ、ここのチャンネルは視聴率たかいぞ・・・」

子供達はにこにこしながらこたえている。

哀は帽子なんてかぶってないし、コナンもめがねをかけていない。

ということは、瓜二つなのだ。

インタビューをおえた二人を服部はだきあげた。

あがさはほかのこたちのてをとってはしりだした。

コナン「なにすんだよ～大阪の兄ちゃん～」

哀「わたしあそこで遊びたぁい～！！」

服部「我慢せい！！！」

服部は二人をビートルに乗せた。
次に博士が他の子達をいれた。
みんなぶーぶーいって文句をいっている。
それから博士は車をだしてでていった。
～そのころジン、ウォッカ～
ウォッカ「相変わらずみつかりませんね。シェリーのやつ。」
ウォッカとジンはテレビをみていた。
テレビ「ぼく、名前、なんていうの？『えっとね、工藤新一！7さい！』」
ジンとウォッカの目線がいっきにてれびにむかった。
テレビには死んだはずの少年うりふたつの子供がうつっている。
テレビ「新一くんか～他のお友達の名前も教えてくれる？『わたしは宮野志保、7歳だよ！』」
次はシェリー煮の少女がうつっている。
ジンはわらった。
ジン「おもしろいじゃねえか。こいつら二人、ここに連れて来い。」

ウォッカ「了解。」

正体（後書き）

ああああああああああああああああ

暖かい存在

工藤邸～

コナン「なんでかえってきちまったんだよ～」

哀「つまんな～い」

コナン「あ、そうだ大阪の兄ちゃん、蘭しらない？俺とおない年の女の子なんだけど最近みないんだよなぁ。」

平次「え、あ、すまん、しらんわ。」

コナン「そ、っか・・・・。」

コナンは悲しそうな優しそうな目でいった。

それを哀がのぞきこむ。

哀「新一君、そのこのことすきなの？」

コナン「ん？まぁ世界で一番うしないたくないやつ、カナ？」

哀「志保も新一君のこと大好きだよぉ♪だって私日本人のお友達新一君がはじめてなんだもん！」

コナン「へぇ。俺は蘭だよ。まったくどこいっちまったんだろ・・・？」

服部「世界で一番・・・か。お前もようゆうわなぁ。」

コナン「そう？でも兄ちゃんにもいるんだろ？蘭みたいな、絶対にうしないたくないやつ。」

服部「へ？どうしてそないなことわかったんや？」

コナン「兄ちゃんの目。幸せそうな、絶対にあいつだけは守りたいっていうか、よくいえないけどそんなきれいな色してる。俺もそういうやついるからさ、だから分かるのかも。それに、」

服部「それに？」

コナン「兄ちゃんとはどっかであったことあるきがするんだ。俺も、

心から頼れたやつでいざというときはおっちょこちょいだけど、守りたいやつを必至でまもるやつだって。そういうふうになんかよくわかんねえけど、記憶されてんだ。」

服部「やっぱ、工藤、やな・・・」

コナン「え？」

服部「いや、なんでもあらへんで。」

そういうと哀とコナンはトランプをして遊び始めた。

コナンの目は、なんだかさびしげで、でも綺麗に澄んでいて。

なぜだか胸がしめつけられた。

その少年は、

強くもあり、

弱くもあり、

なんだかよく分からない存在。

でもみんなが必要として、

そのぬくもりにつつまれて、

逆につつみこんで、

小さい背中とは裏腹におおきな背中。

みているだけで、

顔がほころんでくる。

そう、

暖かい存在。

平次は、

その少年をあらためて、

親友だと思った。

普通の女の子（前書き）

歩美と哀の話です☆

普通の女の子

ここは工藤邸のある一室。

歩美と哀がすわりこんでいる。

歩美「ねえ哀ちゃん、なんで自分が志保だと思うの？」

哀「私は宮野志保以外のなんでもないよ。私は宮野志保だって。それを忘れたらいけないって。記憶の中にしっかりきざみこまれてるの。だから私は宮野志保だからね☆」

歩美「ふぅん。じゃぁさ、好きな子いる？」

哀「う～ん、やっぱり新一君！！はじめてのお友達だもん！！それにずぅっと前から好きだった気がする！！」

歩美「え～。じゃぁ歩美とライバルだね～。でもこれからもずっと友達だよ～」

哀「うん！！」

歩美「でもね、コナン君は蘭お姉さんのことがすきなんだ・・・」

哀「蘭、お姉さん？」

歩美「うん！とってもやさしくて綺麗で、私の憧れの人！！」

哀「ふうん。」

あゆみ「あ、明日ここに来るっていってたよ！」

哀「歩美ちゃんもくるの？？」

歩美「歩美ぁ・・・こよっかな♪」

哀「うん！じゃぁ楽しみにしてるね！！」

歩美「あ、あのさぁ、メイク、してみない？」

哀「メイク？」

歩美「私と哀ちゃんでやったことあるんだよ！やろうよ！電話で有希子おば、お姉さんにメイク道具かして、っていえばいいし。あ、蘭おねえさんと園子おねえさんもよんでここでパーティーしよ！泊り掛けの♪もうすぐクリスマスだし。プレゼント交換とか。いまからいっしょにプレゼントつくろう♪」

哀「うん！博士にいってくる♪」

歩美「歩美もいく♪」

誘拐

哀「できたぁ！キーホルダーだよ！」

歩美「歩美もぉ♪貝殻のネックレスぅ♪」

哀「かわい～ね♪お料理は蘭お姉さんがつくってくれるし。これで準備ＯＫだね！」

歩美「あ、歩美もう帰らなくちゃ。じゃあね！」

哀「うん、ばいばい！！」

歩美がでていった。

哀はひとりニコニコしながらベットのうぇに転がった。

哀「新、一、君・・・」

そうつぶやくとそのまま寝入っていった。

～そのころコナン～

コナンはこっそり蘭をさがすため家をでた。

コナン「いないな、蘭・・・」

いまいるのは蘭とよくしのびこんだ古い灰ビルだ。」

後ろからつけてくる怪しい影。

そんなのにきずくはずもなく、落ち着いた様子で蘭をさがしていた。

後ろから誰かがおそってきた。

後ろをとたんにふりかえったが一足遅く、クロロホルムをしみこませたハンカチを口にあてられた。

コナン「んんっ！？！？」

そのままコナンは気絶した。

男に抱えられ、車にのせられてコナンはつれさられた。

～平次、博士、哀～

平次「工藤のやつ、どこにいったんや？」

博士「くぅ」

哀「新一君は！？」

平次「とりあえず警察に連絡するんや！！」

博士「あ、ああ。」

～コナン～

コナン「ん・・・」

コナンは目をさました。

頭が痛んだ。

気絶させられたときに頭もうってしまったんであろう。

記憶も頭をうった衝撃でもどっていた。

手首と足首にはきつく縄がかけられている。

口には猿轡がされていて声もだせない。

いまいる場所は・・・

車のなかだった。

後部座席にコナンはねかせられていた。

車には運転席にウォッカ、助手席にベルモットが座っている。

車はポルシェではなく、ただの黒い車だった。

前にいる二人はコナンが目をさましたことには築いてない様子だった。

コナンは縄をとりあえず引っ張ってみる。

だが一向にきれる気配はなく、腕に傷がついていくだけだった。

どうやらコナンがおきていることにベルモットがきずいたようだ。

ベルモット「おきたみたいよ？」

ウォッカもちらりとこちらをふりかえりにんまり笑った。

ベルモットは少し冷や汗をたらしていた。

コナンはウォッカとベルモットをにらんだ。

そして動きにくい腕を必至にうごかしてポケットを探る。

ベルモットはきずいているようだったが不敵な笑いをしながらみまもっている。

コナンはポケットから探偵バッチをだしてスイッチを手探りでＯＮにした。

誰につながっているかは知らないが。

それにきずいたのは哀だった。

～哀たち～

哀「探偵バッチから、何か聞こえるよ？」

平次「ほんまか！？それ！？」

哀「うん。」

バッチ「ブオオ・・・」

平次「車やな・・・」

あがさ「まさか奴等に・・・」

平次「その可能性がたかいな・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1902z/

記憶のおくのそこ

2011年12月20日15時46分発行